

# 『源氏物語』にみる否定疑問文の様相

永田里美

## はじめに

近年、国立国語研究所における「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」（平成25～28年）をはじめとし、日本語疑問文の諸相に新たな光があてられている。ただし、そこで対象となっているのはいわゆる肯定疑問文であり、疑問文に否定の要素が加わった否定疑問文については、管見の限り、歴史的研究として正面から論じられたものは少ない。

否定の事態を問う疑問文が肯定の事態を問う疑問文と論理的には等価にありながら、運用上において少なからぬ差異が見られることは既にD.Bolinger（1978）で指摘されているとおりである。しかし、その表現価値については必ずしも一つの理論で説明されるものではない。井上・黄（1996）は日本語と中国語の否定疑問文を比較考察することによって、各言語体系における否定疑問文の運用上の相違が存在することを指摘している。

否定疑問文のふるまいに文化的慣習が影響するとなれば、歴史的な観点による考察も否定疑問文の諸相を捉える上で有効であると考えられる。そこで本稿では、日本語史上の一時期に考察の範囲を絞り、その時期における否定疑問文の構文や意味用法を詳らかにすることによって、否定疑問文の史的展開についての足がかりを得たいと考える。具体的には、中古における和文作品『源氏物語』を資料として採り上げ、そこに現れる否定疑問文について、現代語との相違に注意を払いながら考察を進めてゆきたい。

## 1. 先行研究

### 1. 1 否定疑問文の普遍的現象と現代語の否定疑問文における特徴

否定の助動詞を伴った疑問文を否定疑問文と称し、否定の助動詞を伴わない疑問文を肯定疑問文と称すると、田野村（1991）が指摘するように、肯定疑問文であれ否定疑問文であれ「所与命題の確認を求める疑問文の場合は、その命題が用いられる（p.126）」ものの、通常の疑問文においては不定詞を伴う疑問文（疑問詞疑問文）を含めて「特に理由がなければ、肯定疑問文の方が用いられやすい（p.127）」。

- (1) 「お父さまとお母さまは恋愛ですか？」「大恋愛です」
- (2) 「何を見ているんです？」「当ててごらん下さい」「鶏ですか？」「いいえ」「あの大きな木ですか？」（田野村1991, p.127）

疑問文には肯定、否定、いずれの答えを多く予想するかという「片寄り (bias)」の存在が認められる(太田1980)。上記のように否定疑問文は肯定疑問文に対して有標であるがために、否定疑問文が発せられた場合は肯定疑問文に比してより大きな「片寄り」が生じやすい。否定疑問文が反語のような修辭疑問文として用いられやすいのはその有標性によるものと考えられる。

こうした否定疑問文の有標性は普遍的な現象であると考えられる一方で、井上・黄(1996)によれば、否定疑問文が用いられる文脈には文化的な相違が見られる。例えば、以下の(3)(4)のように<～デナイコト>という所与命題を受けた否定疑問文は中国語でも用いられるが、(5)(6)のように否定事態の文脈を受けない、つまり所与の文脈から独立した状況において発せられる否定疑問文は必ずしも普遍的であるとは言えないようである。

- (3) 彼は約束を忘れていないという文脈を受けて 本当に彼は約束を忘れていないのですか？
- (4) 彼女は支度に手間取っているのではないという文脈を受けて 本当に彼女は支度に手間取っているわけではないのですか？
- (5) 彼は、ひょっとして約束を忘れてやしないか。
- (6) 彼女のことから、きっと支度に手間取っているんじゃないか。

井上・黄(1996)では(3)(4)のような否定疑問文を「単純真偽疑問文」と称し、(5)(6)のような否定疑問文は「文脈に対立する仮説Pのわりこみ (p.102)」を特徴とする非分析的な否定疑問文と位置づけ、「誘導型真偽疑問文」と称する。井上・黄(1996)によれば、中国語の場合、「誘導型真偽疑問文」(非分析的な否定疑問文)は相手との同意がすぐに得られやすい(文脈の流れを容易にPであるという方向に誘導できる, p.97)文脈、例えば、(7)(8)のような確認要求としての文脈では使用することができるものの、

- (7) (誰かとおもったら) 井上じゃないか。
- (8) ほら、やっぱり計算を間違えてるじゃないか。(井上・黄1996, p.96)

(5)(6)のように聞き手との同意や事態の真偽が不確かな状況においては否定疑問文ではなく正反疑問文が担うとされる。

こうした真偽が不確かな状況において用いられる否定疑問文のうち現代語の「ノデハナイカ」は安達(1999)、宮崎(2005)において文法化が進んでいると指摘されている。また家村(1994)は「不確かさを表す否定疑問文『ノデハナイカ』」は外国語学習者にとって習得しにくい否定疑問文であるという。ここまで挙げてきた現代語における否定疑問文の特徴をまとめておく。

(9) 否定疑問文は肯定疑問文に対して有標である。

(10) 否定疑問文は所与の文脈から独立して用いられることがある。この場合、次のBタイプは必ずしも他言語において一般的であるとはいえない。

A 肯定事態の同意が聞き手との間ですぐに得られやすい文脈で用いられる。

B 肯定事態の真偽が不確かな文脈において用いられる。特に現代日本語では「ノデハナイカ」という形式の文法化が進んでいる。

## 1. 2 古語における否定疑問文研究

現代日本語の否定疑問文には普遍的性格が認められる一方で、他言語には見られない用法が存在すること、また、形式として非分析的な、さらには文法化の進んだ否定疑問文が存在することが指摘されている。他方、古語に関する研究においては管見の限り、わずかに山口(1984)が表現性に主眼を置いた通史的考察を行っているほかは、矢島(2016)が近世期における否定疑問文の考察を通して「否定疑問文は、特定の固定的な表現方法が広く定着していたわけではない領域に、いわば『新規参入』の表現として成立したものである(p.193)」ことを指摘しているが、当該論考は否定疑問文を通して上方語と江戸語の特徴を分析することが論点となっており、「新規参入」に関する詳細な跡付けは後考を俟つ状況にある。古語における否定疑問文の様相はいまだその輪郭が把握された状況にあるにすぎない。ここでは山口(1984)を取り上げ、そこに残された課題を示すこととしたい。

山口論文では上代から現代までの文献に現れる否定疑問文を、表現性に主眼を置いて分類している。そこでは、まず否定疑問文が2種に分けられている。

- ・「論理否定」…「論理性のめだつ否定のはたらき」
- ・「情意否定」…「確認志向の情意性がめだつような否定のはたらき」

(引用は山口1990, p.66)

前者は「…(である)か、それとも…(で)ないか」という事態の肯否が並立した疑問文や、例えば「誰が…ないか」という不定詞が付加された否定疑問文が属している。先に上げた「片寄り」に関していえば肯定事態への解釈は見られないタイプであるといえる。後者の「情意的否定」はその表現性によって次の4つのタイプに分類され、形式上の変遷はみられるものの、用法としては通史的に認められるものとされている(用例は本稿と関わりの深いもののみ引用する)。

①「疑問性」…被予測事態を確認する。

- ・「容疑性」たしかにその人といはずや。(源氏・浮舟)
- ・「危惧性」ふりすてゝけふはゆくともすゝか河やそせの浪に袖はぬれじや(源氏・賢木)
- ・「期待性」御でしにやはなし給はぬといふ。(宇津保・忠こそ)
- ・「勧誘性」ここにやは立たせ給はぬ。所さりきこえむ。(源氏・葵)

②「詠嘆性」…被発見事態に伴う詠嘆の情意の現れ。

- ・「驚嘆性」みれば、さねたゞのさい將にあらずや。(宇津保・藤原の君)
- ③「確認性」…現実的な事態・判断を確認する。具体的には「説得性」「同調要求性」「非難性」がみられる。
  - ・「説得性」しかるに、此増賀上人の、名利の思ひをやがてふりすて給ひけん、ありがたきには侍らずや。(撰集抄 1・1)
- ④「確認・反語性」…否定態の事柄を疑問の助詞で確認する。具体的には「主張性」「非難性」「制止性」「催促性」がみられる。
  - ・「主張性」かひなくくち惜しとはおもひたまはじや。(宇津保・嵯峨の院)

山口論文は否定疑問文の用法を俯瞰的、通史的に知る上で、示唆に富んでいるが、現代語との相違や、日本語史上の一時期における共時的体系という面においてなお考察を深めてゆく余地を有している。なかでも「情意的否定」における①の「被予測事態の確認」については「被予測」がどのような文脈で発せられたものなのか、所与文脈との関係を考察する余地がある。また、「期待性」「勧誘性」における「…ヤハ…ヌ」という語法に関してはまさに当該論考で述べられているように「どの程度標準的な用法であったかは一考を要する(1990, p.74)」ものであることが挙げられる。「ヤハ」「カハ」についての言及は永田(2018)、同(2019)に譲ることとし、本稿の調査対象から外すこととする。

以下に、中古の否定疑問文にはどのような構文的特徴が見られ、またどのような文脈のもとに発せられるのかということを具体的な用例を通して検討を行いたい。

## 2. 『源氏物語』に現れる否定疑問文の構文的特徴

最初に疑問に関わる助詞「ヤ」「カ」と否定に関わる助動詞「ズ」「ジ」「マジ」さらには「ザラム」との共起について『源氏物語』を調査した結果を示す<sup>(注1)</sup>。

(表1)

カ		
文中用法	不定詞カ…ザラム	15
	不定詞カ…マジキ	11
	不定詞カ…ヌ	1
	小計	27
文末用法	…ヌカ	6
	…マジキカ	1
	小計	7
	合計	34

(表2)

ヤ		
文中用法	…ズヤ…ム	16
	…ヤ…ヌ	2
	…ヤ…ザラム	1
	小計	19
文末用法	…ズヤ	22
	…マジヤ	1
	…ジヤ	12
	小計	35
	合計	54

疑問に関わる助詞「ヤ」「カ」と否定に関わる助動詞との共起状況としてまず以下の傾向が挙げられる。全体的な傾向としては否定疑問文の用例数がさほど多くないということである。後に触れる高山(2016)では『源氏物語』(葵～朝顔巻)の疑問文として「疑

問詞疑問文」256例、「肯否疑問文」172例の合計428例の数を読んでいる。否定疑問文の用例数が少ないのは、肯定疑問文に対して有標であるだけでなく、現代語ほど文末形式として頻繁に用いられていないのではないかと推察される。次に表1からは文末用法について、「カ」が「ジ」や「ザラム」のような推量に関わる助動詞によって表される事態を承接しないことが読み取れる。表2からは文中用法について、否定に関わる助動詞が「ヤ」の結びに現れにくいということがわかる。これらは否定疑問文がどのような事態を問いの対象にするのかということに関わる現象である。これらの傾向を見据えながら次節では否定疑問文を「カ」「ヤ」の文末用法と文中用法とに分けて用例をみていくこととする。

### 3. カ・ヤの文末用法による否定疑問文

#### 3. 1 カの文末用法による否定疑問文〔…ヌカ〕〔…マジキカ〕

まず〔…ヌカ〕〔…マジキカ〕の否定疑問文からみてゆく。『源氏物語』中、否定疑問文の用例は以下の7例である（本文は新編日本古典文学全集に依る。用例末の数字は全集の巻一頁を記したものである。なお表記は私に改めた箇所がある）。肯定疑問文と否定疑問文とが並立された(11)が1例として

- (11) 「たしかには知るべきやうもなきを、ただ、ものよりのぞきなどして、それか、あらぬかと見定めむとなむ思ふ。」(浮舟25-116)

見られたほかは「～デナイ」という否定事態の文脈を受けるものであった。例えば、次の(12)は養父の源氏が玉鬘の態度を見て「親の顔は知りたいものところ聞くが、そうお思いでない」様子の玉鬘に向けて発せられたものである（※は筆者が補い、波線部は否定事態の所与文脈を示すものとする）。

- (12) (※義父の源氏に対してよそよそしい態度をとる玉鬘に対して)「灯こそいと懸想びたる心地すれ。親の顔はゆかしきものところ聞け、さも思さぬか。」とて、几帳すこし押しやりたまふ。(玉鬘22-129)

類似例を示す。いずれも〔…ヌカ〕〔…マジキカ〕は既定の否定事態を受けて発せられていることがわかる。

- (13) (※体調が悪く、申問もできぬ様子を受けて)「まして何ごとをか、聞こえさせむ。さても、なほ、この御忌のほどには、いかでか。忌ませたまはぬか。」と言へば、「なやませたまふ御響きに、さまざまの御つしみどもはべめれど、忌みあへさせたまふまじき御気色になん。…」(蜻蛉25-227)

- (14) (※相手の素性がよくわからない様子を受けて)「尋ねきこえたまふべき人は、

まことにものしたまはぬか。さやうのことのおぼつかなきになん、憚るべきことにははべらねど、なほ隔てある心地しはべるべき。」とのたまへば、「人に知らるべきさまにて世に経たまはば、さもや尋ね出づる人もはべらん。今は、かかる方に、思ひかぎりつるありさまになん。」(手習25-353)

- (15) くれなゐに落つる涙もかひなきはかたみの色をそめぬなりけり 聴色の氷とけぬかと見ゆるを、いとど濡らしそへつつながめたまふさま、いとなまめかしうきよげなり。(総角24-331)
- (16) (※句宮に逢おうとしない浮舟について) ためらひたまひて、「ただ一言もえ聞こえさすまじきか。いかなれば、今さらにかかるぞ。なほ人々の言ひなしたるやうあるべし。」とのたまふ。(浮舟25-191)

調査資料中、唯一、例外的な用例として(17)が存在した。この「さは侍らぬか」は否定事態の文脈を受けるわけではない。ただしこの本文には「さも侍らぬことかな」(別本系)の異文が存在する。また、阪倉(1993)は中古の「…カ」には疑問の意味は希薄で「へえ…なのかい」という程度の意味しか有さない用法が現れると述べている(p.186)。

- (17) (※夫婦の関係において)「…繋かぬ舟の浮きたる例もげにあやなし。さははべらぬか。」と言へば、中将うなづく。(帚木20-68) (※異文：侍らぬことかな)

いずれにせよ […ヌカ] […マジキカ] は […ヌ+カ] […マジキ+カ] と分析的に機能しており、既に起こっている否定的事態への説明・解釈の適宜に用いられるものであるといえる。次節でみる […ヤ] の用法のような肯定事態への大きな片寄りは認めがたい。

### 3. 2 ヤの文末用法による否定疑問文 […ズヤ] […ジヤ] […マジヤ]

続いて文末に位置する「ヤ」の否定疑問文 […ズヤ] […ジヤ] […マジヤ] をみてみる。これらの用法には次に示すように

- (a) 否定事態を述べ立てるタイプ
- (b) 否定事態を問いかけるタイプ
- (c) 否定事態を反問して肯定事態の確認を行うタイプ

という3つのタイプが存在する。いずれのタイプにおいても […ズヤ] と […ジヤ] の相違は描かれる事態の設定が現時点にあるか、将来にあるかという時制の問題に過ぎない。また […マジヤ] については当為に関わる。こうしたことから […ズヤ] […ジヤ] […マジヤ] は各々の形式が […ズ+ヤ] […ジ+ヤ] […マジ+ヤ] と分析的に機能していると考えられ、現代語における否定疑問文のような非分析的な文末形式とは言い難い。さらに結論を先取りして述べると、(c) の否定事態を反問して肯定事態の確認を

行うタイプは問われる事態が知識や経験として安定しており、聞き手との間で容易に同意が得られやすいものであるといえる。以下、用例をタイプ別に挙げる。

(a) 「否定事態の述べ立て」と解釈できるもの17例

次の用例は、玉鬘という女性に夢中になっている夫が嫉妬深い妻に慰めの言葉をかけたところ、その妻が夫に対して「私は、何とも気にはかけませぬよ」と述べている場面である。

- (18) 「年ごろの契り違へず、かたみに後見むと思せ。」と、(※夫が妻に) こしらへきこえたまへば、(中略) 「(※妻) ここにはともかくも思はずや。もてないたまはんさまを見るばかり。」(真木柱22-362)

類似例を以下に示す。いずれも「否定事態+ヤ」という構成が看取される。

- (19) (※ひどくおもいつめてはならぬと慰める源氏に対して) 「いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。」(葵21-39)
- (20) (※明石の君が尼君に対して述べる) 「人にすぐれむ行く先のことも(※私は)おぼえずや。数ならぬ身には、何ごともけざやかにかひあるべきにもあらぬものから、(※父君とは)あはれなるありさまに、おぼつかなくてやみなむのみこそ口惜しけれ。…」(若菜上23-120)
- (21) 「(※私が大君を思ふは) 世の常になよびかなる筋にもあらずや。」(総角24-230)
- (22) 「(※私は) こと繁くのみありて、とぶらひ参でずや。」(常夏22-243)
- (23) 「(※私は優劣の判定を) 知る人にもあらずや。」と卑下したまへど(梅枝22-408)
- (24) 「目も(※私は涙で)見えずや。」と、おししぼりつつ見たまふ。(柏木23-334)
- (25) 「いかでか、さる(※他界した筈の人が生きている)ことははべらん。」と、思ひたまふれど、心とおどろおどろしうもて離るることははべらずや。と思ひわたりはべる人のありさまにはべれば、(手習25-367)
- (26) (※柏木から小侍従へ) 「今はよし。過ぎにし方をば聞こえじや。ただ、かくありがたきものの際に、け近きほどにて、心の中に思ふことのはし、すこし聞こえさせつべくたばかりたまへ。」(若菜下23-220)
- (27) (※尚侍より源氏への和歌) 身をなげむふちもまことのふちならでかけじやさらにとりずまの波(若菜上23-84)
- (28) (※匂宮から中の君へ) 「返り事書きたまへ。見じや。」とて、外さまに向きたまへり。(宿木24-464)

(b) 否定事態の問いかけと解釈できるもの7例

次に挙げる用例は、薫が宇治にかくまっている女性の正体を探ろうとして、匂宮が大内記に宇治の話題を持ちかける場面である。

- (29) 「右大将(※薫)の宇治へいますることなほ絶えはてずや。寺をこそ、いとかしこく造りたなれ。いかでか見るべき。」(浮舟25-114)

この用例がそうであったように以下の例のいずれもが否定事態の文脈を想定して発せられる。[…ヌカ] […マジキカ]との違いは、「カ」による否定疑問文が目前に起こった既定の否定事態を確認する<sup>(註2)</sup>のに対して、「ヤ」は[…ズ] […ジ] […マジ]で表される否定事態について、それが成立するか否かを問うている。近藤(1998)は「カは対象事態へ適用する説明解釈の適否」に関わるとし、同(1995)では「ヤは事態の成立如何」に関わると指摘する。それらの機能がそのまま否定疑問文に反映されているといえる。これらの例は次の(c)タイプのように肯定事態への大きな片寄りは見られず、先の(a)タイプとの間に截然とした差が設け難い例もある。

- (30) (※前例と場面は同じ。下々の者がその女性の噂話をしていたという大内記の話聞き、さらに真相を探ろうとする匂宮)「たしかにその人とは言はずや。かしこにもとよりある尼ぞとぶらひたまふと聞きし。」「尼は廊になむ住みはべるなる。この人は、今建てられたるになむ、きたなげなき女房などもあまたして、口惜しからぬけはひにてあてはべる。」(浮舟25-114)
- (31) (※八の宮について)「いまだかたちは変へたまはずや。俗聖とか、この若き人々のつけたなる、あはれなることなり。」などのたまはず。(橋姫24-128)
- (32) 「(※玉鬘の)容貌などは、かの昔の夕顔と劣らじや」などのたまへば、「必ずさしもいかでかものしたまはんと思ひたまへりしを…」(玉鬘22-121)

(c) 否定事態を反問し肯定事態を確認していると解釈できるもの11例

最後に3つ目のタイプをみておく。次の用例は(18)で採り上げた場面とほぼ同じであり、嫉妬深い(夫婦の約束を忘れたかのように見える)妻へのなだめとして「長年、夫婦の約束を交わしていること(肯定事態)」を否定疑問文によって確認しているところである。

- (33) 「年ごろ契り聞こゆることにはあらずや。世の人にも似ぬ御ありさまを、見たてまつりはてんとこそは、こころ思ひしづめつつ過ぐし来るに、えさしもあり果つまじき御心おきてに、思し疎むな。…」(真木柱22-359)

次の例は浮舟の消息について答えない侍従に対して、匂宮の使者が問いただす場面である。



- (34) 「又、(※匂宮が) さりととも頼ませたまひて、君たちに対面せよと仰せられつる御心ばへもかたじけなしとは思されずや。女の道にまどひたまふことは、他の朝廷にも古き例どもありけれど、まだ、かかることはこの世にあらじとなん見たてまつる。」(蜻蛉25-206)

このタイプに属する例は、所与の文脈として「～デナイ」という否定の事態を必ずしも受けるわけではないものが存在する。しかし、いずれの反問用法も一般事実、眼前の事実のように聞き手に対して容易に肯定の解答へと誘導することが可能な事柄が対象となっている。類似例を示す。

- (35) 「よう思へば、内裏は、中宮おはしますとて、こと人はまじらひたまはずや。君に仕うまつることは、それが心やすきこそ、昔より興あることにはしけれ。」(竹河24-95)
- (36) (※紫の上の独言)「おほかたものの心を知らず、言ふかひなき者にならひたらむも、生ほしたてけむ親もいと口惜しかるべきものにはあらずや。」(夕霧23-457)
- (37) 宮(※藤壺)の、御心の鬼にいと苦しく、(※光源氏と生き写しのような若宮を)人の見たてまつるも、あやしかりつるほどのあやまりをまさに人の思ひ咎めじや、さらぬはかなきことをだに疵を求むる世に、いかなる名のつひに漏り出づべきにかと、思しつづくるに、身のみぞいと心憂き。(紅葉賀20-326)
- (38) (※柏木は)さらぬ顔にもてなしたれど、まさに目とどめじやと大將はいとほしく思さる。(若菜上23-142)
- (39) (※和歌) ふりすてて今日<sup>は</sup>行くとも鈴鹿川八十瀬の波に袖はぬれじや (賢木21-94)

また〔…ジャ〕については「サリトモ」「ズハ」のような仮定条件句が共起するもの特徴的である。これらは山口(1996)によれば「現実仮定」と呼ばれ、「基本的に既存の現実を踏まえた仮定表現(p.263)」と位置づけられる。調査資料において「現実にあるかどうかわからない(p.19)」ことを示す「疑問仮定」に否定疑問文は現れなかった。

- (40) (※葵の上が亡くなったとはいえ)「思し棄つまじき人(※夕霧)もとまりたまへれば、さりとともものついでには立ち寄せたまはじやなど慰めはべるを…」(葵21-64)
- (41) 宮も、さりととも、そのほどのありさま思ひ出てたまはば、わが聞かんとくもをもすこしは憚りたまはじやと思ふに、(宿木24-388)<sup>(注3)</sup>
- (42) (※葵の上の死後)「かう、この日ごろ、ありしよりけに誰も誰も紛る方なく、見なれ見なれて、えしも常にかからずは、恋しからじや。いみじきことをばさるものにて、ただうち思ひめぐらすこそたへがたきこと多かりけれ。」(葵21-59)

〔…マジヤ〕は以下に示す1例にとどまる。否定事態の文脈を受けるもので、かつ一般的事実に基づき、聞き手の同意が得られやすいものである。なお川上（1975）によると中古和文系資料で当該形式が行為要求表現として用いられるのはこの『源氏物語』の用例程度であることがわかる。

- (43) 宰相中将は負方にて、音なくまかでたまひにけるを、「親王たちおはします御送りには参りたまふまじや。」と押しとどめさせて（匂兵部卿24-34）

「ヤ」「カ」の文末用法による否定疑問文の特徴をまとめておく。

- (44) ・〔…ヌカ〕〔…マジキカ〕

既存の否定事態の文脈を受け、その否定的事態に対する説明解釈の適否を問う。

- ・〔…ズヤ〕〔…ジヤ〕〔…マジヤ〕

否定事態を述べ立てる、問いかける、否定事態を反問する用法が存在する。

解答が肯定事態に片寄る場合は、聞き手との同意を得ることが容易である。

いずれも非分析的な文末形式として機能しているとは言い難く、現代語のように話し手にも聞き手にも事態の真偽が不確かな状況で用いられる用例は見出されなかった。

#### 4. カ・ヤの文中用法による否定疑問文

##### 4. 1 カの文中用法による否定疑問文〔不定詞カ…ヌ〕

文中に位置する「カ」の機能は松下（1930）、阪倉（1993）等によって「（主文の）述語以外に疑問点がある」と指摘されるように、否定疑問文の用例においても「～デナイのはなぜカ」のように述部に既定性を読みとることができる。これらは全て分析的な否定疑問文である。

- (45) （※応対を拒む大君に対して薫は）いと人少なにて、心細くて臥したまへるを、「などか御声をだに聞かせたまはぬ。」とて御手をとらへておどろかしきこえたまへば（総角24-318）

以下のような反語の例も多い。いずれも否定事態における不定部分を問うている。

- (46) （※左馬の頭が語る理想の妻とは）「ただひたぶるに児めきてやはらかならむ人をとかくひきつくろひては、などか見ざらむ、心もとなくとも、直しどころある心地すべし。」（帚木20-64）
- (47) （※朧月夜との間に御子が生まれないことに対して）「などか御子をだに持たまへるまじき。口惜しうもあるかな。契り深き人（※源氏）のためには、い

ま見出でたまひてむと思ふも口惜しや。」(澁標21-281)

#### 4. 2 ヤの文中用法による否定疑問文〔…ズヤ…ム〕〔…ヤ…ヌ〕

文中に「ヤ」が位置する否定疑問文としては〔…ズヤ…〕と〔…ヤ…ヌ〕の形が見られた。文中に位置する「ヤ」の用法は主文の述語に疑問点が置かれる(松下1930, 阪倉1993等)とされる。以下にその例をみていく。

##### 4. 2. 1 〔…ズヤ…ム〕

〔…ズヤ…〕は否定の事態を問うものの、肯定事態への片寄りを読み取れない。むしろ否定事態を積極的に想定しているものである。

- (48) (※末摘の花に逢いたいと申し出る光源氏に対して)「さやうに聞こしめすばかりにははべらずやあらむ。」と言へば、「いたう気色ばましや。…」(末摘花20-267)
- (49) (※浮舟の失踪について後の宮は)なほのたまはずやあらんと(※薫は)思へど、御気色のゆかしければ、大宮に、さるべきついでつくり出でてぞ啓したまふ。(手習25-366)

ここにみられた疑問表現における推量の助動詞「…ヤ…ム」については以下の節でふれることとしたい。

##### 4. 2. 2 〔…ヤ…ヌ〕〔…ヤ…ザラム〕

次に「ヤ」の結びに否定の助動詞が現れる用例をみる。これらは『源氏物語』中、以下に示す3例が存在するのみである。

- (50) (※中将が)帰りなむとするを、(※尼君は中将の)笛の音さへ飽かずいとどおぼえて(※和歌)ふかき夜の月をあはれと見ぬ人や山の端ちかき宿にとまらぬ(手習25-318)
- (51) (※葵を見舞う源氏の消息文)「おぼろけにてや、この御返りをみづから聞こえさせぬ。」(葵21-35)
- (52) 「いづ方にぞ」、「みな下屋におろしはべりぬるを、えやまかり下りあへざらむ」と聞こゆ。酔ひすすみて、みな人々簀子に臥しつつ、静まりぬ。(帚木20-97)

先に述べたとおり通常「ヤ」による疑問文では次の(53)「大げさでない紙はありますか」のように述部が疑問の対象になり、その結果として事態の成立を問う疑問文となるが、

- (53) 「ことごとしからぬ紙やはべる。御局の硯と。」と請ひたまへば、(野分22-283)

ここに見出された用例(50)(51)はいずれも下線を引いた「ヤ」の述語部分ではなく、「ヤ」の承接部分「あはれと見ぬ人」、「おぼろけなり」が疑問の対象となっている。

また、上記の「…ズヤ…ム」がそうであるように、高山(2016)によれば、中古において「ヤ」の結びに現れるのは推量の助動詞が圧倒的に多い。同論考では調査対象の一つである『源氏物語』から疑問文428例を数えているが、そのうち334例が推量の助動詞を伴うことを示している(註4)。これらのことを考慮すると、『源氏物語』に見出された「…ヤ…ヌ」はきわめて例外的で、和歌、消息文における修辭的な用法であると言わざるを得ない。「ヤ」「カ」の文中用法による否定疑問文は分析的に機能しており、肯定事態への片寄りは見られないといえる。

## 5. 不確かさを表す疑問文

以上、『源氏物語』に現れる否定疑問文の用法からは、文末用法「…ズヤ」「…ジヤ」「…マジヤ」において、反問による肯定事態への大きな片寄りがみられたものの、いずれも分析的な否定疑問文であることがわかった。また現代語における「…ノデハナイカ」に代表されるような、話し手にも聞き手にも事態の真偽が不確かな状況で用いられる否定疑問文の用法は見出されなかった。不確かさと疑問文の関係について、本稿では次の2点に注目してみたいと考える。1点目は疑問の助詞による「無形の未然法」(松下1930)であり、もう1点目は「…ヤ…推量の助動詞」による間接疑問文としての機能(近藤1987)である。

### 5. 1 無形の未然法

最初に疑問の助詞による「無形の未然法」についてふれておきたい。松下(1930)では仮定条件節の帰結句に未然態を表す「ム」「ジ」「マシ」が現れることを原則とした上で、形式には未然の意味はないが、仮定条件節の帰結句に現れるものを「無形の未然法」と称している。そしてその中に、「疑問態」を挙げている(引用は松下1978, p.801)。

- (54) 立ちよらば涼しくやあると掬ふ手の雫に濁る井出の玉水(千五百番歌合)  
(55) 折りとらば惜しげにもあるか桜花いざやどかりて散るまでは見む(古今集)

『源氏物語』では以下のような用例が存在する。

- (56) 折りて見ばいとどにほひもまさるやとすこし色めけ梅の初花(竹河24-69)

この指摘は従来、さほど注視されてこなかったが、現代語の疑問助詞「カ」と比較してみた場合、次のような点で興味深い。現代語の「カ」において、こうした仮定条件節

の帰結句へ生起できるのは次のような聞き手目当て性を有した命令、勧誘もしくは問いであり、

(57) 彼が行くなら、君も行かないか。(命令・勧誘)

(58) 彼が行くなら、彼女も行かないか? (問い、自問を含む)

推定や危惧を表す判断は生起しにくい。推定や危惧を表す場合は「カナ・カシラ・カト思ウ」や「カモシレナイ」や「ノデハナイカ」「シヤシナイカ」などの複合的な形式を伴う傾向にある。

(59) 彼が行くなら、彼女も行かない {かな・かしら・かと思う}。

(60) 彼が行くなら、彼女も行 {きやしないか・くのではないか}。

このように、現代語の疑問の助詞「カ」は問いかけ性がある場合は単独で用いられるものの、判断を表す場合は単独で用いることが難しい。一方で、現代語では「ノデハナイカ」など否定疑問文による文末形式を始めとした「カモシレナイ」「カナ・カシラ」など、疑問の助詞を複合させた判断、疑念形式が多いことに注意される。

このことは、疑問の助詞「ヤ」「カ」がやがて失ってゆく「未然態」的意味<sup>(注5)</sup>を補うように、発達したものと推測される。

## 5. 2 ヤと推量の助動詞

4節で述べたように、文中「ヤ」に着目するとその結びは圧倒的に推量の助動詞が多く、否定の助動詞が現れることは例外的である。疑問表現の文末に推量の助動詞が多用されることについて、近藤(1987)は古典語に間接疑問文が存在しないことに関連させて、次のように解釈している。

[これはなにだか] わたしにはわからない。

[はたして来る人があるのか] 疑問に思う。

しかし、中古語では間接疑問文が存在しないので、推量の要素を疑問文の中に繰り込んで次のような形にせざるを得ないのではないか。

これや、なにならむ。

来る人や、あらむ。(引用は近藤2000, p.292)

近藤論文では「ヤ」の結びの推量系助動詞に着目し、「…ヤ…ム」が「～かどうか私にはわからない」というような間接疑問文として機能する形式なのではないかと述べられている。この考えに従うと、「…ヤ…ヌ」が存在しないのは否定疑問文が間接疑問文「～かどうかわからない」という不定性を文型として持ち得なかったと捉えることができる。

(61) 身にもし疵などやあらんとて見れど、ここはと見ゆるところなくうつくしければ、(手習25-289)

(62) \* [身に、もし、疵など] やあらぬ。

否定疑問文がどのような過程を経て、不確かさを表す形式となっていたのかについては疑問の助詞と助動詞の変遷とともに考究すべきであろう。

### おわりに

以上、本稿では『源氏物語』を資料として、そこに現れる否定疑問文の用例に検討を加えてきた。得られた結果をまとめておく。

(63) 否定疑問文は肯定疑問文に対して有標である。

(64) 否定疑問文の多くは所与の文脈である否定的な事態を受けて発せられる。所与の文脈から独立して用いられる場合、反問によって表される肯定事態は一般的事実、経験として安定した知識内容である。

	カ	ヤ
文中用法	不定詞カ…ヌ；否定の事態について不定部分を問う	1) …ズヤ…ム；否定事態を想定する 2) …ヤ…ヌ；修辭的用法
文末用法	既定的な否定の事態を確認する	一般事実・現在・将来的事態における (a) 否定の事態を述べ立てる (b) 否定の事態を問いかける (c) 否定の事態を反問し肯定事態を確認する

いずれも否定の助動詞と疑問の助詞とが分析的に機能しており、現代語のような否定事態の文脈を受けない、文脈から独立した否定疑問文が真偽に対する不確かさを表す用法は見出されなかった。

ここに示した否定疑問文の様相は『源氏物語』という限られた資料における調査範囲内で得られた結果ではあるが、それらの発せられた文脈をこまやかに見ることによって現代語の様相と異にしていることが理解された。またその背景には疑問の助詞自体のふるまいが現代語と異なっていることに着目した。こうした現象もふくめて、さらに和文資料の調査範囲を広げることで本稿に述べてきた否定疑問文の様相が明らかになるものとする。その詳細を跡づけることは別稿に譲りたい。

## 【注】

- 注1 調査にあたっては、コーパス検索アプリケーション「中納言」(国立国語研究所)、『源氏物語大成』(池田亀鑑編、中央公論新社)にて検索を行い、『新編日本古典文学全集 源氏物語』1～6(小学館)にて稿者が本文を確かめた。
- 注2 文末の「カ」はム系の助動詞で表される事態を承接せず、『源氏物語』ではアリ13例、ナシ11例、タリ6例、リ6例、ズ7例、ベシ5例、ヌ3例、マジ1例、オハス1例を受ける。
- 注3 なおこの用例については異文が多数存在する。すこしは→すこし(青表紙本系)、給はしや→給ははや(河内本系)、給はしやは(別本系)
- 注4 本稿の調査においても、ヤの結びとして推量の助動詞が現れない幾つかの用例には次のような異文が存在するという本文の揺れがみられた。(例)「ねたういでやしぬる(若菜上3-304)→しぬらん、漏らし奏し給ふことありし(薄雲4-234)→ありけむ
- 注5 永田(2001)では『源氏物語』現れる副詞モシ63例のうち、39例が「ム」を伴う仮定条件句に生起すること、それ以外に生起する24例についてはヤによる疑問表現が20例と多いことを指摘している。

## 【参考文献】

- 安達太郎(1999)『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 井上優(1994)「いわゆる非分析的な否定疑問文をめぐって」『国立国語研究所報告107 研究報告集15』国立国語研究所
- 井上優・黄麗華(1996)「中国語と日本語の真偽疑問文」『国語学』184 日本語学会
- 太田朗(1980)『否定の意味』大修館書店
- 家村伸子(1994)「日本語否定疑問文の運用能力に関する研究—話し手の不確かさを表す否定疑問文の運用能力調査を中心に—」『広島大学日本語教育学科紀要』4 広島大学教育学部日本語教育学科
- 川上徳明(1975)「中古仮名文における命令・勧誘表現体系」『国語国文』44.3.京都大学文学部国語学国文学研究室
- 川上徳明(1976)「源氏物語の命令・勧誘表現」『国語国文』45.11.京都大学文学部国語学国文学研究室
- 北原保雄(1981)『日本語助動詞の研究』大修館書店
- 近藤泰弘(1987)「古文における疑問表現—「や」と「か」—」山口明徳編『国文法講座 第3巻古典解釈と文法』明治書院(近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房所収)
- 近藤要司(1995)「『源氏物語』の助詞ヤについて」『宮地裕・敦子先生古希記念論集 日本語の研究』明治書院
- 近藤要司(1998)「『源氏物語』の助詞カの文末用法について」『金蘭短期大学研究誌』29 金蘭短期大学
- 阪倉篤義(1993)『日本語表現の流れ』岩波書店
- 高山善行(2016)「中古語における疑問文とモダリティ形式の関係」『国語と国文学』93(5) 東京大学国語国文学会
- 田野村忠温(1988)「否定疑問文小考」『国語学』152 日本語学会
- 田野村忠温(1991)「疑問文における肯定と否定」『国語学』164 日本語学会
- 永田里美(2001)「中古和文系資料における副詞モシ」『筑波日本語研究』6 筑波大学大学院文芸言語研究科日本語学研究室
- 永田里美(2018)「『源氏物語』における反語表現：会話文中の『ヤハ』、『カハ』について」『跡見学園女子大学文学部紀要』53 跡見学園女子大学
- 永田里美(2019)「『源氏物語』における反語表現(2)：地の文・心内発話文・和歌の『ヤハ』、『カハ』について」『跡見学園女子大学文学部紀要』54 跡見学園女子大学
- 松下大三郎(1930)『改撰標準日本文法』中文館(勉誠社1978)
- 宮崎和人(2005)『現代日本語の疑問表現 疑いと確認要求』ひつじ書房
- 矢島正浩(2016)「否定疑問文の検討を通じて考える近世語文法史研究」大木一夫・多門靖容編『日本語史叙述の方法』ひつじ書房
- 山口堯二(1984)「疑問表現の否定」『国語と国文学』61-7 東京大学国語国文学会(山口堯二(1990)『日

本語疑問表現通史』明治書院 所収)

山口堯二 (1996) 『日本語接続法史論』和泉書院

Dwight Bolinger (1978) “YES-NO Questions are not alternative questions.” Henry Hiz (ed) Questions,  
Dordrecht : D.Reidel Publishing Company.

## 付記

本稿は2001年筑波大学国語国文学会第25回大会にて発表した「中古和文系資料における否定疑問文－『源氏物語』を資料として－」を骨子としている。

(ながた さとみ 明星大学)